

じょう らく じ ひ てん ず
常楽寺の飛天図

稲城市東長沼2111
☎0423-78-2111
発行 1996. 2.20



相沢五流が描いた常楽寺の飛天図

東長沼にある常楽寺阿弥陀堂には、江戸時代中期の
絵師相沢五流直筆の飛天図が残っています。この絵は
阿弥陀堂外陣の鏡天井中央部にあり、軽やかに舞う天
女二人の姿が極彩色で描かれています。

この飛天図を描いた相沢五流は、江戸時代中期に活躍した多摩地方を代表する絵師として有名です。五流は、延享3年(1746)に関戸村(現在の多摩市関戸)に生まれ、家督をついで関戸村の名主となりました。通称を源左衛門といい、号として五流または源休郭、関良岡齋と称しました。若い頃から江戸や京都を往来し、見聞を広め、20歳の頃に関良雪を師とし本格的な絵の道に進みました。五流の作品は、現在30点程残っていますが、ほとんどが晩年のもので、狩野派の影響を受けた作品が多く見られます。五流の遺作は、多摩市を中心に周辺の八王子・町田・府中・稲城・日野・昭島の各市に現存しており、多摩地域における広範な活動の足跡を残していることがわかります。

稲城市内に唯一現存するのが常楽寺の飛天図で、五流晩年の作品と考えられます。飛天図の左下には、「良岡齋五流」の落款が見え、この「良岡齋」を用いるものが晩年の作品に多いことか



相沢五流の自画像(杉田勇氏蔵)

ら、この飛天図も晩年（19世紀初期）の作品と見ることができます。飛天図は、一般的には虚空を飛ぶ天人を描いた絵画のことで、仏の浄土の空中を飛びながら天の音楽を奏で、あるいは天の花を散らして舞う天女を描いています。常楽寺の飛天図も空中を舞う天女二人が描かれ、手には笛と鏡鉞を持ち音楽を奏でています。まとった天衣をひるがえしながら軽やかに飛ぶ姿が巧みな技法で描かれています。江戸時代中期（約180年前）当時の色彩が比較的よく残っています。

飛天図の両わきには、龍の絵が4面ずつ描かれています。墨一色で描かれています。飛天図と同様に、その技法は巧みで、同時期の作品と考えられます。

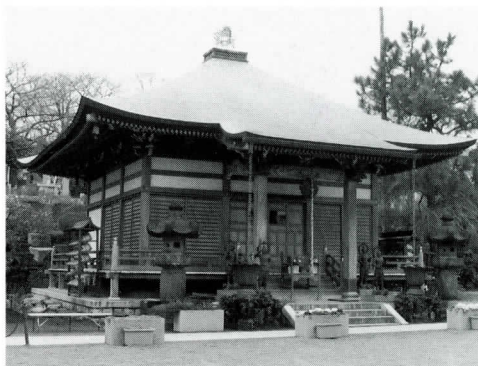
相沢五流の作品は、寛政12年（1800）から文政5年（1822）までのものが約30点残っていますが、その中の代表的な作品をご紹介します。

「樓閣山水図」

寛政12年（1800）五流55歳の時の作品で、現在知られるなかでは最も古い作品です。湖面に接して高台に樓閣建築を描き、遠景には雲の湧き出る山なみが描かれています。ほとんど墨一色で描かれ、水墨画的な雰囲気をもっていますが、風景は漢画風の表現です。全体の構図や風景の構成に狩野派の影響を感じさせる作品です。

「竹林七賢図」

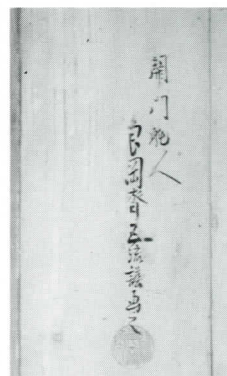
八王子市・永林寺の本堂杉戸26枚の表裏に描かれた竹林七賢図をはじめとする4種類の絵画は、五流晩年の文政4年（1821）の作品で、76歳の円熟した腕のたし加さが見事に表現された大作です。相沢五流の代表作といえる作品です。



飛天図のある常楽寺阿弥陀堂



飛天図の両わきに描かれた龍の図



飛天図左下の落款



樓閣山水図（浜田正喜氏蔵）



竹林七賢図（八王子市・永林寺蔵）